



TITLE:

兩漢傭價變遷考證

AUTHOR(S):

石, 洋

---

CITATION:

石, 洋. 兩漢傭價變遷考證. 東洋史研究 2012, 71(2): 191-218

ISSUE DATE:

2012-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/200232>

RIGHT:

# 東洋史研究

第七十一卷 第二號 平成二十四年九月發行

## 兩漢傭價變遷考證

石 洋

はじめに

一 先行研究の整理

二 私的雇用関係における給食制度

三 傭價の變遷

四 傭價上昇説の二點の補充

（一） 個別の雇用労働者が負擔できる消費人口數の變化

（二） 在郷編戶民の雇用労働に對する姿勢の變化

おわりに

はじめに

漢代雇用關係については、傭價（雇用労働者に賃金として支拂われる銅錢もしくは穀物・布帛など）が重要な研究對象とされ

ている。傭價を正確に認識することは、雇用労働者階層の歴史的推移、ないし前漢中後期以降の社會狀況の理解に對して有益である。そのため、漢代の雇用關係に關する先行研究は多かれ少なかれ傭價に觸れている。しかしながら、史料は不足し、且つ分散的で、互いに矛盾する場合も多く存在している。それが雇用關係研究の難點となっており、傭價の額について今に至るまで定説がない。

本稿は、傳世文獻と出土史料を利用して、傭價の解明を試み、雇用労働者と雇用關係の研究のための基礎を作りたい。すなわち、一定の時間軸内における傭價の一般的水準を示した上で、社會の發展に伴う傭價の時代的な變遷を確認して、雇用労働者の社會的な需要量を把握するものである。

## 一 先行研究の整理

傭價はつとに漢代史研究者に注目されてきた。それにもかかわらず、初期の研究は單なる史料集のような、傭價を一般商品の價格と並べたものに過ぎない<sup>(1)</sup>ので、本稿ではそれに對する言及を割愛する。獨立性と系統性を兼ね備えた專論は前世紀の五十年代に初見する。この時期から、漢代の雇用労働と雇用労働者とをめぐる研究は本格的に展開され、個別分散的史料は雇用労働者階層の變遷と有機的に結び附けられ、それらの史料に新たな意味を與えたのである。ゆえに、本稿では、この時期の研究を整理の起點とする。

最近六十年間の研究においては、傭價は時間・地域・仕事の種類及び雇用労働者の年齢・身體條件などによって大差があると考えられており、おおむね以下の諸見解に分かれている。

A. (漢代) 最低一箇月三〇〇錢<sup>(2)</sup>。

B. (漢代) 通常一箇月約二〇〇錢<sup>(3)</sup>。

C. 前漢時代、通常一箇月二〇〇錢であつたが、後漢時代は、通常一箇月一〇〇錢、後漢末に至ると、一箇月、僅

か數百錢になった。傭價は漢代において次第に低下していった。<sup>(4)</sup>

D. 漢代に私的雇用關係は、一箇月四〇〇～五〇〇あるいは七〇〇～八〇〇錢となり、その中に食費は含まれなかった。また官府の踐更代役錢は二〇〇〇錢であると規定されるが、實際に施行されることはなかった。<sup>(5)</sup>

E. 前漢時代では一箇月二〇〇錢餘り、後漢時代では一箇月一〇〇〇錢となる。<sup>(6)</sup>

F. (漢代) 一箇月三三〇錢から二〇〇〇錢までの間を變動している。<sup>(7)</sup>

G. (漢代) 一箇月最低一五〇錢、前漢時代では、通常、三三〇錢前後に變動するが、後漢では、一箇月通常、二〇〇〇錢となる。<sup>(8)</sup>

H. 時間と地域と仕事の種類の相違によって變化し、定めがたい。<sup>(9)</sup>

I. (漢代) 通常一箇月一五〇から三〇〇錢まで。<sup>(10)</sup>

J. (漢代) 一箇月六〇〇錢前後。<sup>(11)</sup>

このように具體的な史料に對する認識の差異によって、先行研究の結論は大きく分かれている。また、上掲の諸研究では高敏(C)・林劍鳴(E)・宋傑(G)三氏を除き、みな漢代の傭價を靜態的なもの、もしくは逆に變動が激しすぎて定められないと判斷するが、漢代において傭價の水準に全般的な變動の傾向が存在しないという點に關しては、一致している。上述の先行研究に對する批判と繼承については、まず、史料を慎重に分析せねばならない。居延漢簡、睡虎地秦簡などの出土史料の公開は、傳世文獻に見えない情報を多く提供したが、それ自體が孕む史料制約のため、非常に慎重な取扱いを要する。例えば、居延漢簡に見える邊境守備の「庸」(代戍庸)<sup>(12)</sup>は、明らかに軍事的性格を有しており、市場の雇用労働者と本質的な差異があるので、簡中に示されている價格は本課題の檢討對象としない。<sup>(13)</sup>一方、睡虎地秦簡に見える刑徒の「日居八錢」は、懲罰的勞役の贖金であり、一般の雇用労働の賃金より高いようである。<sup>(14)</sup>そのため、この金額をもって當時の一日当たりの傭價を推定することは問題である。要するに、傳世文獻を體系的に批判・整理し、それを研究の基礎

としなければならない。勞榦(A)・翦伯贊(B)・林劍鳴(E)・宋傑(G)諸氏は史料の選擇において、この原則に則っている。従って、諸氏の結論は漢代のある時點における傭價の状況を反映していると考えられる。

また、傭價については動態的に考察すべきである。宋傑は、傭價の變動は主に①勞働力の需給關係の變化、②貨幣の購買力の變化、③勞働力そのものの差異(例えば、年齢の差異)、④従事する仕事の差異、⑤經濟力の發展水準の差異に影響を受けると指摘した。<sup>(15)</sup>漢代の物價の總體的狀況からみれば、後漢は前漢より高く、加えて漢代を通じて、雇用勞働者に對する需要が一貫して變わらなかったとは確言できない。そのため、傭價を靜態的に考察することは適當でない。それに對して、謝桂華(H)は廣汎に資料を集めたが、簡牘にみえる代戍庸の賃金を一般の雇用勞働者の傭價と混同してしまい、傭價は生活必需品の價格の變動によつて絶えず變動している、と結論づけた。すなわち傭價の總體的な趨勢は把握できないとしたのである。この見解は支持しがたい。なぜなら、上述の如く、代戍庸の賃金を傭價の檢討材料として取り扱うことは不適當であるほか、傳世文獻に對する研究が深化して、若干の矛盾も合理的に解釋できるようになっており、傭價問題を正確に認識することに、必要な條件を提供するようになっていくからである。

以上、本稿における二つの檢討の原則、つまり傳世文獻を體系的に批判・整理しそれを研究の基礎とすること、及び傭價を動態的に考察することを説明した。さらに、勞榦が漢代の雇用關係を「官」(公的)と「私」(私的)に大別する見解<sup>(16)</sup>は、示唆に富み、傭價の檢討にも有益であるので、本稿もこれに従う。また、諸關係史料を仔細に吟味すれば、雇用勞働者の仕事はその内容によつて大まかに「輕勞働」と「重勞働」<sup>(17)</sup>とに分類でき、相當程度、史料の缺落を補充することができる。そのため、本稿もこの分類を前提とする。

## 二 私的雇用關係における給食制度

一般的に言えば、勞働報酬は主に銅錢・布・穀物で支給され、これらすべての賃金は傭價と呼ばれる。賃金以外に仕事

中に食事が提供される（給食）場合もあり、これも労働報酬の一部である。中低層の家庭の生活消費に、飲食支出は無視しえない比率を占めているので、給食を受けるか否かは実際の労働報酬、生活水準と密接に関連する。そこで、傭賃を正確に比較するため、まず、労働報酬に食事提供を含めるかどうかを明らかにしておこう。

私的雇用関係は公的なものより早く発生したので、まず、それから見てみよう。私的雇用関係において、戦国から三國にかけての間、仕事中に雇い主が雇用労働者に食事を提供するのは一般的なことであった。<sup>(18)</sup>勿論、『後漢書』に示される梁鴻の事跡のように、雇用労働者が自宅で食事する場合も存在していたが、<sup>(19)</sup>總じて言えば、私的雇用関係において、仕事中に雇い主が食事を提供するの是一般的であると言つてよい。例えば、『太平經』卷一「四大壽誡」に、「時に行客なるを以て、富家に賃作し、其の奴使と爲る。一歳に數千なるも、衣はその中より出し、餘視るべきもの少なく、積むこと十餘歳にして、自用して故郷に還るを得べし」とあるように、「衣」には言及されるが、「食」に言及されることはなかった。この点からも食費は支拂われた賃金から拂う必要がなく、雇い主が負擔すべきであつたことを證明する。特に「保」のような雇用労働者は、通年で雇い主の家で暮らしている可能性が高く、<sup>(20)</sup>賃金から食費を拂う必要がないことはさらに容易に想像がつくであろう。

公的雇用労働者については、傳世文獻にも公開された出土史料にも明確な記載が存在しないため、状況はやや複雑であり、仕事内容・性格をあわせて分析しなければならない。論旨が難駁になることを避けるため、次章で傭賃とともに検討する。

### 三 傭賃の變遷

史料制約のため、前漢初期の状況は不明だが、現時点で、概括的に傭賃の水準がうかがえる記録は江陵鳳凰山十號墓から出土した「中服共侍約」が最も早い時期のものであろう。これは「服長」が徭役に當たる民衆を集め、皆を徭役に服

させるために結んだ契約であり、ほぼ文帝末あるいは景帝初年のものであると推定される。その中に、徭役に當たる際に、もし事前に休暇を申請せず、あるいは病氣になって参加できなかったならば、一日、三〇錢の罰金に處し、もし家に勞働力がない場合であれば、代わりにその分の賃金を出さなければならぬと規定されている。<sup>(21)</sup> 従つて、理論上、當時の鳳凰山地域において、雇用労働者の一日の傭價は三〇錢の罰金額を超えるはずがない。また、江陵鳳凰山一六八號前漢墓（墓主が埋葬された時期は文帝十三年、前一六七年）から出土した貨幣及び稱錢衡から見ると、當時、この地域で流通していた貨幣は文帝五年から發行された四銖半兩錢である。<sup>(22)</sup> もしこの三〇錢を法定の重量によつて取えて武帝以降の三官五銖錢に換算すれば、大體二四枚に相當するため、當時の一日當たりの傭價はそれを上回るはずがなからう。

「中服共待約」に示される罰金額はただ後文の結論を検證する際の、一傍證と見做せるのみである。そのため、最も時期が早く、且つ直接的な關係史料は、おそらく漢武帝が貧民を上林苑に移住させ、鹿を養わせたことに關わる記録である。う。

武帝時、上林苑中の官奴婢及び天下の貧民の貲五千に満たざるをして徙して苑中に置き鹿を養わしむ。因りて鹿矢を收撫するに、人日ごとに五錢。元帝時に至りて七十億萬、以て軍に給し西域を撃つ。<sup>(23)</sup>（『漢舊儀』卷下）

上の記事には恐らく脱文があるが、文意によつて「人日ごとに五錢」を境として二つの段落に分けられる。前段において、貧民が政府に雇われている雇用労働者であるとは明記されていないが、その性格から見ると雇用労働者と殆ど同様である。それ故、「五錢」も賃金の金額と見做せる。「五錢」がどの種類の貨幣かについては、まず、後段の「元帝時に至りて七十億萬」という文からみておこう。これは『漢書』食貨志下に「孝武の元狩五年（前一八一年）三官初めて五銖錢を鑄するより、平帝元始（後一〇五年）中に至りて、錢二百八十億萬餘を成す」とある記載とあわせて考えれば、三官五銖錢の錢數を指すものであろう。そうすると、前段の「五錢」も三官五銖錢を指すと見做すが、最も穩當である。つまり、史料中の貧民一人の月給は最大、三官五銖錢で一五〇錢となる。この水準の賃金によつて人々ほどの程度の生活を維持するこ

とができるのだろうか。武帝時代の穀物価格についての記録が残っていないので、正確には把握しえないが、假に一石が七〇銭とすれば、この月給では、最大で二石餘りの穀物しか買うことができない。一石一〇〇銭とすれば、一石半買える計算になる。<sup>(24)</sup> 秦漢時代、一般成年男子の毎日の必要最低限度の穀物の量が五升であり、一月当たりに換算すれば一石半となり、ちょうど一〇〇銭一石の場合に、買える穀物の量と同じである。そうすると、「日五銭」は當時、僅かによりやく一人を養えるだけであり、穀物価格が少しでも高騰した場合、政府に對する算錢すら支拂えない。ただし、注意すべきは、政府がこれらの貧民を上林苑に徙したのは、庸を以て賑恤に代えたものでしかないことである。文中ではこれらの貧民が官廳から給食されたのか否か言及していないが、かれらが官奴婢と一緒に作業している以上、官廳から食事を提供されたはずである。従って、貧民の實際の報酬は一箇月一五〇銭の賃金に一箇月の食費を加えた金額であると推測される。政府が貧民を上林苑に遷したのは庸を以て賑恤に代えたものであり、且つ勞働強度もあまり高くないので、一箇月一五〇銭は恐らく市價よりもやや低いものである。

時代は少し下るが、過更錢も檢討の手がかりとすることができ。

前漢前期においてもともと兵役であった「更徭」は、時代が降るにつれ次第に雜役へ移行し、服役の範圍も縣あるいは郡の管内に縮小していった。<sup>(26)</sup> また、『漢書』吳王濞傳によると、

然るに其の國に居るや銅鹽を以ての故に、百姓賦無し。卒踐更すれば、輒ち平賈を予う。【注】服虔曰く、當に更卒と爲るべきを以て、錢三百を出す、之を過更と謂う。自ら行きて卒と爲る、之を踐更と謂う。吳王民心を得んと欲して、卒と爲りし者その庸を願うに、時月に隨いて平賈を與うるなり。

遅くとも、景帝時代になると、諸侯國では、踐更に當たる者が政府に一定の金額を支拂うことによって徭役を免除される（過更）ことが許されるようになった。官府はこの過更錢をもつて他の人を雇い更徭を完遂させる。武帝時代に至ると、富裕層による金銭を出して「過更」することが一般化したばかりではなく、一般の編戸民でも、例えば官營鹽鐵生産を行



う諸郡において、更役に服する勞苦に堪えられない者が個人的に雇用労働者を雇い、代わりに徭役に服させる場合も少なくなかつた。<sup>(28)</sup> そのため、この時期の過更錢は雇用労働者の賃金と見なしうる。

然るに、「過更錢」の金額については、加えて二つの疑問点を解かなければならない。第一に、吳王濞傳の服虔の注によれば、一箇月三〇〇錢であつたが、しかし『漢書』昭帝紀の「三年以前逋更賦未入者、皆勿收」條の下で、如淳は別の解釋を示している。

更に三品有り、卒更有り、踐更有り、過更有り。正卒に常人無く、皆な當に迭いに之を爲すべし、一月に一更し、是れを卒更と謂うなり。貧者の更を顧うの錢を得んと欲せし者、次に直る者錢を出して之を顧う。月ごとに二千、是れを踐更と謂うなり。天下の人皆な戍邊に直ること三日、亦た名づけて更と爲す。律の所謂繇戍なり。丞相の子と雖も戍邊の調に在り。人人自ら三日の戍に行くべからず。又た行く者自ら戍すること三日なるべきも、往きて便ち還るべからず。因りて便ち住まること一歳にして一更す。諸そ行かざる者、錢三百を出して官に入る。官以て戍者に給す、是を過更と謂うなり。

この如淳注によると、「過更錢」は三日三〇〇錢であり、服虔の説と食い違っている。先學の中にはこの二つの矛盾する注釋に束縛される者が多い。濱口重國は最も早く、昭帝紀の如淳の注の本質的な誤りを指摘し、服虔の「一箇月三〇〇錢」という説のほうが正しいとすべきであるとした。また、濱口は如淳注の「月ごとに二千」が『漢書』溝洫志の如淳注に引用されている『律說』「平賈一月に、錢二千を得」という記載に由來するものとし、『律說』は後漢時代の著作と考えられているから、この「月二千」の意義に對しても疑念があると強調した。<sup>(29)</sup>

第二に、「一箇月三〇〇錢」はそもそもいつの時期の價格であろうか。服虔は吳王濞傳の「平賈」を解釋するために、この金額に言及したのである。しかし、後漢末の服虔が前漢初期の吳王國の過更錢數を知りえたか否かについては先學により疑問を抱かれている。濱口によれば、この「一箇月三〇〇錢」は早くとも後漢桓帝・靈帝時代のもので、服虔が自身

の時代の状況に準じて推定したものである。<sup>(30)</sup> 妥當な見解である。但し、これは服虔時代の備價であったことを意味するものではない。渡邊信一郎は更卒制度について前漢昭帝の始元末年（前八一年）に畫期的な變革が発生したと指摘した。<sup>(31)</sup> すなわち、武帝時代において鹽鐵專賣に加えて、一般の編戶民が堪えられないような重い更役が課せられて、昭帝期の鹽鐵會議において文學たちの激しい非難を受ける結果になった。そのうち、徭役たる「更徭」は文獻の記載に見えなくなり、總體的に税金のような「更錢」に代わっていったのである。となると、いわゆる「（月）出錢三百」（一箇月三〇〇錢）とは、服虔時代の更錢の金額であつたことがわかる。

言うまでもなく、更役は徭役から總體的に税金へ移行した以上、「更錢」の金額は、徭役の代役金、すなわち「過更錢」のように市價によつて變動していたはずがなく、一定の時間軸内において定額であつたと考えられる。理論上、服虔の主張した「（月）三百錢」はこの制度の創設、あるいは最終改定の時期にまで遡ることができる。現時點の史料條件で、更錢は前漢成帝期の翟方進が丞相であつた期間に増額されたことが知られるが、當時すでに議者たちによつて「不便」と非難されている。<sup>(32)</sup> 恐らく翟方進の政治上の失脚とともに程なくもとの額に戻されたと思しい。それ以外に金額調整の記録は一切見えない。また、近年、邊境で出土した簡牘中に宣帝・成帝時代の更錢の關係史料が見える。特に、「入〇月更錢」と記載されている諸簡が注目される。

入錢六百以賦七月更。元康三年八月辛酉朔壬戌、廩御高心里張丁受縣泉置畜夫弘。<sup>(33)</sup>

入錢五百一十四、以賦二月更。元康五年二月癸丑朔庚辰、廩御延壽里李□／<sup>(34)</sup>  
 (V92DXT1612④: 12)

□□□□十四人□廩□十二月更。元康五年正月癸未朔癸未、縣泉置畜夫弘附廩御進喜里董□□<sup>(35)</sup>  
 (190DXT0210①: 20)

入元年五月六月通更錢千二百 五鳳三□□／<sup>(36)</sup>  
 (E.P.T56: 98)

入五年二月更錢八百。比二、直八十四。河平五年二月丙申、□令史博受柳里爰猛<sup>(37)</sup>  
 (H90DXT011②: 14)

前の三簡に、徴收の更錢は耆夫の手を経て廢御に交附されたと記され、おそらく「廢」はもともと更役に當たる者が當番すべきところであつたのであらう。上記諸簡に見えるように、更錢を月毎に納めることは、昭帝の制度改革以前に順番に當直していたことの痕跡である。金額についていえば、元康五年（前六一年）二月の一簡には滯納があつたかもしれないが、それ以外の元康三年七月の「六百」、五鳳元年（前五七年）五・六月の「千二百」、及び河平五年（前二四年）二月の「八百、比二、直八十四」（加算して九〇〇に近似する）はみな、三〇〇の倍数あるいは三〇〇の倍数に近似する。もし當時の更錢が一人三〇〇錢であつたとすれば、諸簡の記事に矛盾しない。そのため、宣帝中期から成帝河平年間の間、更錢の金額は服虔時代の更錢の金額と異ならないと、判斷できる。その結果、一人「出錢三百」の過更の金額は昭帝始元末・元鳳初年にすでに定着したという可能性が高い。過更の本義は人を雇い自分の本來擔當すべき徭役を代わりに遂行させることであり、その金額は勿論、一般の市價によつて決定されなければならない。言い換えれば、昭帝始元末年の市場において、雇用労働者の一般の賃金は一箇月三〇〇錢であつた。さらに補足すべきは、更役に就勞する際、官府の食事提供を受けられるので、雇われる雇用労働者は勿論、同等の待遇を受けられるはずであつたということである。そうすると、實際の報酬は、すなわち傭價の三〇〇錢に食費を加えたものである。彼らの勞働強度は深刻であり、且つ雇われているときには、身體的自由も比較的長く制限される。そのため、賃金は前述の養鹿者の「一箇月一五〇錢」より高い。

武帝中後期から昭帝中期の傭價水準は、概ね以上の二種類に分かれる。性質から言えば、みな公的雇用關係であり、且つ食事の提供もあるので、給食を受ける私的雇用労働者と同レベルで比較できるようになった。この二種類の雇用關係についていえば、前者は「救濟」雇用、後者は「代役」雇用に由來する。傭價は本來市場の需給により絶えず變動するものであるが、前者は本來救濟の變形であるので需給關係によるものでない。そして後者は更役賦稅化への過程において經濟的需要によつて調整される機會を次第に失つてしまったものである。故に二種類の官府傭價の變動は極めて遅いもので、「代役」雇用の賃金三〇〇錢及び「救濟」雇用の賃金一五〇錢という上下二種類の金額は當時の人々に強い印象を残

した。例えば、『九章算術』卷六均輸の例題にその痕跡が見える。

今均賦の粟有り。甲縣……粟一斛に二十、自ら其の縣に輸す。乙縣……粟一斛に一十八、傭の價一日に一十錢、輸所に到るに七十里。丙縣……粟一斛に一十六、傭の價一日に五錢、輸所に到るに一百四十里。戊縣……粟一斛に一十二、傭の價一日に五錢、輸所に到るに二百一十里。己縣……粟一斛に一十、傭の價一日に五錢、輸所に到るに二百八十里。凡そ六縣の賦粟六萬斛、皆な甲縣に輸す。

ここに見える粟の値段は極端に安く、そして『九章算術』序に宣帝期の耿壽昌は「舊文（古い算術書）の遺殘」に基づき添削したという記録が見えるため、この例題は前漢宣帝期に創作されたと推測される。<sup>(38)</sup> この例題からみれば、傭價の格差は地域の差異によるものである。しかし、その値段はただ五錢と一〇錢の二種類のみしかなく、穀物價格のように、距離が遠くなるにつれ少しずつ安くなるものでもない。つまり穀物價格の値段との間に均衡が取れない。恐らく市場の傭價から直接取材されたものではない。更に、この例題の題目は「均賦粟」であって、一見してわかるように、官府の財政的物流と密接に關係している。そこで、筆者は、例題に示される傭價は前述の救済雇用（貧民の一箇月一五〇錢）と代役雇用（過更錢の一箇月三〇〇錢）という二種類の賃金をもとにして假定されたものであると推測する。また、前漢末期に王莽が政治をもっぱらにした時期、太皇太后が天下の女性刑徒に對する配慮を示すため、懲罰とする薪の伐採に代わって、「雇山錢」を納めることを許可した。「雇山錢」の金額も一箇月三〇〇錢<sup>(39)</sup>で、當時の更錢數を基準に制定されたものであると考えられる。

「雇山錢」が更錢をもとにして制定したもので、市價に準じたものでないと判断する理由は、武帝・昭帝以後、傭價が總體的に上昇する傾向を示しているからである。特に、重労働の賃金は一箇月三〇〇錢前後という金額を維持していなかった。『漢書』溝洫志に、

後二歲（成帝河平三年）、河復た平原に決し、……復た王延世を遣し之を治さしむ。……六月にして乃ち成る。復た延

世に黄金百斤を賜う。河を治する卒の平賈を受くるに非ざる者、爲に外繇六月を著す。【注】蘇林曰く、平賈、錢を以て人を取り卒と作し、其の時の庸を顧うの平賈なり。如淳曰く、律說、平賈一月に、錢二千を得。

とある。「治河卒」は主に「正卒」で構成されるが、その中には、臨時に徴發される編戸民もいたはずである。<sup>(40)</sup>その勞働の性質は昭帝期以前の更卒とあまり區別がない。この史料に見える「平賈」は、如淳によって引用された『律說』が後漢時代の著作と考えられているので、成帝時代金額と關係がないはずである。そもそも成帝時代の「平賈」の金額は不明である。前述のように、昭帝期に「更徭」は總體的に「更錢」の徴收に轉換された。もし急場に應じて臨時に編戸民を徴發したとすれば、「更錢」の免除をその報償とすれば十分であるといえる。しかし今回の工事は成功したため、皇帝が特に「平賈」を恩賞として「治河卒」に與え、且つこの恩賞は「外徭」の免除との交換も許した。<sup>(41)</sup>となると、この時點の「平賈」は、「月三百錢」すなわち「更錢」納附に固定化されて以降の重勞働賃金より更に高いに違いない。

王莽時代に入ると、一つの興味深い記事があり、傭價が上昇したことを示す有力な證據となしうる。『漢書』王莽傳中に、

莽明堂に至りて、諸侯に茅土を授く。……圖簿の未だ定まらざるを以て未だ國邑を授けず。且つ奉を都内に受けしめ、月ごとに錢數千。諸侯皆な困乏し、庸作する者有るに至る。

とある。この記述は始建國四年（二年）のものであり、通貨が最も混亂した時期に當たる。『漢書』食貨志下の記載と併せて考えれば、この「月ごとに錢數千」は王莽時代の小錢を指すはずである。その重さは一銖で五銖錢の五分の一なので、假に法定重量により購買力を推定すれば、この俸祿は五銖錢の約千錢程度に相當する。そのような俸祿をもち、なお諸侯の身分でありながら雇用勞働に就いたことから見て、當時の賃金額には十分な魅力があり、恐らく以前の「一箇月一五〇錢」あるいは「三〇〇錢」程度より高く、ないし河平三年の重勞働の「平賈」と比較しても、少額ではないであろう。

また、昭帝期以降の前漢時代の記録と推定される史料に、傭價が窺えるものはさらに三例ある。第一例は、『九章算

術』衰分の記述<sup>(43)</sup>で、「保」の賃金が一月約二一〇錢である。第二例は同書卷六の均輸に、

今傭を取り鹽を負うこと二斛、行くこと二百里にして、錢四十を與うこと有り。

という記述である。負重の傭は一日に三十里を行くことができると計算すれば<sup>(44)</sup>、一箇月で三六〇錢になる。第三例は、居延漢簡に、

□十一月盡二月積四月直二千八百

<sup>(45)</sup>  
(226.17)

とあり、即ち、一箇月七〇〇錢である。この三つの史料の記述は概括的であり、具體的な時點は勿論、226.17簡からは仕事内容さえも判断できない。ただ、三例の内賃金が最低である「保」に着目すれば、その労働強度は武帝期の貧民とは同じだが、「保」の賃金は貧民の一・四倍になっている。226.17に示した一箇月七〇〇錢の賃金に至っては、明らかに一箇月三〇〇錢の過更錢を上回っている。要するに、上記の三つの史料は前漢中後期から傭價が總體的に上昇するという論斷と矛盾しない。

後漢時代に至ると、傭價の關係史料はほぼ私的な雇用關係に限られるため、實勢價格の水準が直接的に反映されうる。最も早い例證は居延新簡に見える寇欽が粟君によって雇われた際の賃金である。「建武三年（後二七年）候粟君所責寇恩事」爰書に、

恩子男欽以去年十二月廿日爲粟君捕魚、盡今正月・閏月・二月、積作三月十日、不得賣直。時、市庸平賣大男日二斗、爲穀廿石。恩居鱣得附業（粟君之妻）錢時、市穀決石四千。（恩の子男の欽は去年十二月廿日に粟君の爲に魚を捕まえた。今年の正月・閏月・二月いっぱいまで、合わせて三箇月と十日であるが、賃金を得ていない。市場の庸の平均價格は、十五歳以上の男で日ごとに二斗、（三箇月と十日で）穀廿石となる。恩は鱣得に居て業（粟君の妻）に錢を渡した時、市場の穀は一石四千錢と取り決められていた。）  
(E.P.F.22: 14~16)

とある。賃金は一箇月毎に六石の穀物で、市價に換算すれば二四〇〇〇錢であった。この金額と前述の前漢時代の賃金水

準には極端な金額の開きがある。王子今がすでに指摘するように、簡冊に記載される物價は全て通常のコ額を遙かに上まわっている。加えて取引の際、常に穀物を仲介として行われていたことは、王莽の貨幣改革のもたらした經濟的混亂によるものである。<sup>(47)</sup>それゆえ、上記冊書の場合、穀物量を標準として前漢の賃金と比べた方がよい。昭帝期の代役雇用の賃金は一箇月三〇〇錢で、假に穀物價格を一石七〇錢としても、換算すれば僅か四石餘りである。寇欽の嚴冬期における漁勞は勿論十分に過酷な勞働であつたが、一箇月六石の賃金は前漢期の代役賃金の一・五倍となっている。

後漢時代の建武一六年（後四〇年）より、貨幣體系が五銖錢へ回復されてきた。建武一六年以後も、備價は相變わらず上がりつつあつたようである。

比較的最早い事例は後漢初年の鄭均に關するものである。『後漢書』列傳一七鄭均傳に次のようにある、

鄭均……兄は縣吏と爲りて、頗る禮遺を受け、均數しば諫止するも、聽かず。即ち身を脱して傭と爲り、歲餘、錢帛を得、歸りて以て兄に與う。曰く、物盡く復た得べし、吏に爲りて臧に坐さば、終身捐棄せらる。兄其の言に感ず。遂に廉絜と爲る。

一年餘りの賃金は縣吏への賄賂に匹敵するほどに達しており、その多さが窺える。上記の「錢帛を得」は『東觀漢記』の同傳に「數萬錢を得」に作り、その金額の大きさが一層明らかになっている。當該記事の「錢」は五銖錢を指すはずであり、概算すると、月給は二〇〇〇錢に達するのである。<sup>(48)</sup>

また、『華陽國志』卷三蜀志・汶山郡には、ある異民族の習俗が記されている。「冬は則ち寒きを避けて蜀に入り、庸賃にて自食し、夏は則ち暑きを避けて落に反る。歲ごとに以て常と爲す」とあり、蜀の住民は彼らを「作氏・百石子」と呼んでいたのである。この記述は『後漢書』列傳七六西南夷列傳・冉駹夷の記述と類似しており、後漢時代においてこの習俗が既に存在したことがわかる。任乃強は上記史料中の「百石」を冬場に雇われる彼らの賃金であつたとする。<sup>(49)</sup>「百石」が賃金を指すというこの判斷に従えば、彼らが毎年、八箇月（最も暑い四箇月を除く）四川盆地で働いたとして、給料が百

	輕勞働	重勞働
前漢武・昭帝期	一五〇錢／月	三〇〇錢／月
この間に傭價が徐々に上昇する		
後漢中後期	一〇〇〇錢／月	二〇〇〇錢／月

※注：上表には賃金以外の給食を省略した。

石ならば、平均して一箇月の賃金は一二石半の穀物となり、寇欽の賃金の二倍餘りに達するのである。

また、後漢後半期の崔寔の『政論』（『群書治要』卷四五所引）には、

長吏約を崇めんと欲すと雖も、猶お當に従者一人有るべし。假令奴無ければ、當に復た客を取るべし。客の庸一月に千、芻・膏肉五百、薪炭・鹽菜 又た五百。二人粟を食すること六斛、

其餘財に馬に給するに足る。

とある。「客庸」は従者であつて肉體勞働に従事するわけではない。しかし、その賃金は一箇月一〇〇〇錢に達し、かつ食事の水準は雇主と大きくは異ならないようである。

以上の諸例から明らかなように、後漢時代の雇用勞働者の賃金は大体、一箇月一〇〇〇錢、あるいはそれ以上の金額に達したのである。<sup>(50)</sup>最後に、如淳『漢書注』に引いた『律說』の「平賈一月に、錢二千を得」という記事に觸れておこう。「平賈」は『律說』が著された時代の市場正價である。

『律說』について、沈家本は、曹魏時代の諸家の『漢律』章句において、鄭玄の注が最も重視され、かつ張晏『漢書』注に明確に「律鄭氏說」と記されていることから、諸家『漢書』注に引かれた『律說』は鄭玄の章句である、と推測した。<sup>(51)</sup>妥當な見解である。鄭玄は崔寔より二十年ほど後の人であるが、二人はどちらも後漢後期の人間であることから、『政論』と『律鄭氏說』とは大體同時代の著作と見なしうる。すなわち、『律說』の「平賈」及び『政論』の「客庸」の賃金は同時代の二種類の賃金である。さらに言えば、如淳は堤防工事の記事の下に「平賈」を引き、かつ昭帝紀の「踐更」の注にも「月二千」に言及したことから見ても、その「平賈一月に、錢二千を得」の勞働は恐らく重勞働であり、『政論』に述べられるような輕勞働に従事する「客庸」とは異なるのである。



以上、兩漢時代における傭價上昇の趨勢を明らかにした。第一章に列挙した先行諸研究において、傭價上昇は、林劍鳴（E）・宋傑（G）兩氏がすでに主張していたが、その理解はなお不十分なものであったといわざるをえない。本稿の作業を踏まえて、傭價變動の概況を示すと前頁の表のようになろう。

#### 四 傭價上昇説の二點の補充

前漢建國より後漢末に至るまで、前後、四百年ほど隔たっているが、現在まで傳わってきた傭價の關係史料は非常に分散的・一面的であり、且つ性格も均質でない。更に、この期間においては、貨幣制度が何度も變更され、貨幣の購買力もそれによって相違を呈した。加えて同じく五銖錢の貨幣體系の下でも、後漢中期より重量の減少した五銖錢を變造錢・私鑄錢と混在して使用する現象がますます深刻になってきた。以上の諸原因から、單に文獻に記された價格によって總體的な價格趨勢を判斷することは危険である。そうであるならば、前章の考證に基づく「傭價上昇説」は成立し得るのだろうか。また、假に表面的に見て、兩漢時代の間に傭價は上昇するという傾向が確かに存在していたとしても、後漢時代の物價は總體的に前漢のそれより高いから、傭價の上昇は物價の高騰に連動した結果であるに過ぎないということになるのだろうか。以上の疑問に應答するため、本章は戰國後期より後漢末にかけての雇用労働者の集團そのものの兩方面の變化を通じて、前章の論證を補充する。

#### （一） 個別の雇用労働者が負擔できる消費人口數の變化

一般的に言えば、雇用労働者の生活水準の變化は、傭價の狀況をはっきり反映する。というのは、地域・特定の時期・労働種類などに影響を受ける短期間の局地的な傭價の變動、あるいは物價の上昇が唯一の原因となる傭價の高騰は、長期間の大局的な生活水準變動の趨勢に影響を及ぼすには至らないからである。しかしながら、史料制約のため、雇用労働

者の生活水準の變化を全面的に把握することは不可能であり、斷片的な史料を集めて下した結論は、必ずや偏っているに違いない。變則的ではあるが、個別の雇用労働者が負擔できる消費人口數を評價基準とすることが、最も穩當且つ可能な方法である。

先ず、先秦時代の狀況を見てみよう。『韓非子』外儲說右下に

齊桓公 微服して以て民家を巡り、人の年老いて自ら養う者有り、桓公其の故を問う。對えて曰く、臣に子三人有り、家貧しく、以て之に妻す無し、傭となりて未だ反らずと。……桓公曰く、善しと。……令を民に下して曰く、丈夫二十にして室し、婦人十五にして嫁せと。

とあり、裴錫圭はこの史料を戰國時代の授田制度とあわせて考察し、當時の庸作に従事する人について常に「受田」資格のない獨身者であると指摘した。<sup>(52)</sup> 戰國時代から秦末期にかけての史料に、雇用労働者の家庭構造に關する記録がいくつか見える。そこに記される雇用労働者は家庭を離脱した者、もしくは獨身者であった。<sup>(53)</sup> 要するに單獨で生計を立てる者であった。

家庭構造とは別に、前掲の『韓非子』外儲說右下には、三人の息子が傭に出ているが、父親も依然として生活のため自ら働いていると記され、當時の雇用労働者の収入は少なく、本人以外の人間を養えなかったことを傳えている。<sup>(54)</sup> 『說苑』に記される莊周の發言からみて、雇用労働者として生計を立てることは、當時の人間の生活が成り立たなくなる前の最後の選擇であり、できるだけ回避しようとするものであった。先秦時代においても、雇用労働者が妻をもつ例は全く存在しなかったわけではない。例えば、『史記』鄒陽列傳に「於陵の子仲三公を辭し人の爲に園に灌ぐ」とあり、このような記事は『集解』に引く『列士傳』にも確認できるが、『孟子』滕文公下に「身は屨を織り、妻は辟纊す」とあり、そこに妻が見える。しかしながら、『孟子』の記載によれば、人に雇われ畑仕事に従事することがあっても、それだけでは妻子を養えず、必ず他の収入を有さねばならなかったのである。總じて言えば、少なくとも前漢の建國の直前、雇用労働者が單獨

で生計を立てる状況は相當な程度、薄給によつて生み出されたものであつた。

前漢前期から武帝期にかけて、直接の記事が少ないため、その状況ははっきり把握できないが、ただ第三章に引いた養鹿貧民の賃金と當時の穀物價格との比率からみれば、この時期は戰國末期の状況と大きく變わることはなさそうである。然るに、前漢後期及び後漢時代に入ると、以前の状況（特に『韓非子』の記事）とはっきり對照的になった。傳世文獻には、雇用労働の報酬が家族にとつての重要な唯一の収入とされる事例が見出せるようになる。代表的な例證として挙げられるのは班超の事例である。

永平五年（後六二）、兄の固召されて校書郎に詣るや、超母と隨いて洛陽に至る。家貧しく、常に官の爲に傭書し、以て供養す。……之を久しくして顯宗は固に問う、卿の弟は安くにか在るやと。固對うらく、官の爲に傭書し、直<sup>あは</sup>を受けて以て老母を養うと。（『後漢書』列傳三七班超傳）

それ以外に、また梁鴻<sup>(56)</sup>・江革<sup>(57)</sup>・第五訪<sup>(58)</sup>・施延<sup>(59)</sup>・孔嵩<sup>(60)</sup>の例がある。こうした諸例を『韓非子』の説話と對比すれば、兩者の差異を見出すことは難しくない。後漢當時の雇用労働者の負擔できる消費人口数は以前より確かに増加していると言える。もし家族成員の餘分な消費を負擔する必要があるれば、雇用労働を通じて得た賃金を貯蓄することもできるようになった。第三章に引いた『後漢書』に記される鄭均の記事及び第二章に引いた『太平經』大壽誠の記事以外に、また蓋<sup>(61)</sup>・禽堅<sup>(62)</sup>・韓暨<sup>(63)</sup>の例がある。また、讀書人は臨時に雇用労働で生計を立てる、ないし學費を捻出することが一般的になった。これは文獻における衛<sup>(64)</sup>・桓榮<sup>(65)</sup>・公沙穆<sup>(66)</sup>・王奐<sup>(67)</sup>・公孫<sup>(68)</sup>・衛農<sup>(69)</sup>・申屠蟠<sup>(70)</sup>に關する記事によつて證明される。

上記の分析から見ると、前漢後期から後漢末期にかけて、常雇いの賃金によつて獨自の生計を立てることができるとどまらず、相當の餘裕も残るようになった。この餘裕は少なくとも一人分の生活消費を提供できるものであり、戰國末期の状況とは著しく異なっている。

## （二） 在郷編戸民の雇用労働に對する姿勢の變化

戰國後半期から前漢初期にかけて、授田制が普遍的に實施された。當時の雇用労働者には故郷を離れ異郷に生計を営む移民、もしくは戸籍を離脱した無戸籍者が多數存在していた。(71)に挙げた戰國末期、統一秦の諸資料がその例證となりうるほか、張家山より出土した漢初簡冊にも證據がある。(72)それに反して、傳世文獻に記された秦より漢初までの在郷編戸民の生計の手段を仔細に分析した結果、私的雇用労働者となった経歴のある者は一人もいなかった。(73)家族が一定の耕地をもつ陳平のような編戸民は言うまでもなく、飢寒に苦しんだ朱買臣でさえも、雇用労働者となった経歴を持たない。(74)これらの史料から見て、「離郷」したかどうかは雇用労働に従事するか否かの重要な分水嶺であつて、固定的な生活の手段があるかどうかを問わず、少なくとも前漢武帝前期まで在郷編戸民と雇用労働者との間に懸隔があつた。(75)

ところが、上述の状況は宣帝期以降に、轉機が見えるようになった。元康年間、「中興の德」を顯わすため、宣帝は既に斷絶した功臣子孫あわせて一二三人に對し「復家」の優遇を賜つた。その中に、「復家」の時点で戸籍が長安に登録された者が三八人で、當該人物の父祖の諸侯身分を奪つた皇帝以前の先帝の陵邑に登録された者が二二人、祖先の封邑に登録された者が一六人、合計七六人であつた。その數は總數の過半を超えている。前の二種類については、葛劍雄が指摘するように、その中には勿論、徙陵條件に符合し強制的に關中に移された者も存在しているが、人數は多くなかつたはずである。より普遍的な事例は、諸侯が「就國」させられた時、その家族すべてが封邑に遷つたのではなく、子孫の一部はそのまま關中に留まつたというものである。正にそれが原因で、多くの斷絶した諸侯の子孫は關中において探し出されたわけである。(76)そうなると、この七六人の内の多くは戸籍登録地に少なくとも一世代以上暮らしていたことになる。『漢書』高惠高后文功臣表に、「故に孝宣皇帝 愍みて之を録し、……詔して有司をして其の子孫を求めしめ、咸な庸保の中に出版」とあるように、當時の雇用労働者階層の中に既に編戸民の姿が見える。

更に明確な事例が匡衡に関する記事である。『漢書』匡衡傳に、

匡衡……父世よ農夫にして、衡に至りて學を好む、家貧しくして、庸作し以て資用に供す。

とあり、この記事は、『西京雜記』卷二により詳しく記されており、特に雇い主は「邑人大姓」であると明示している。匡衡の家族は代々家郷において農耕を生業として、一定の私有地を保有するものであったはずである。農耕によって日常の生活を維持しうるが、それ以外の費用は雇用労働で捻出せねばならない。雇用労働は既に在郷編戸民にとって無視できない生計の手段となり、その點で武帝期以前の状況と大いに相違する。

上の結果を招來した直接的要因は宣帝期の穀物價格の低迷であり、それによって、「穀賤傷農」という状況が発生した。<sup>(77)</sup>第三章に引いた『九章算術』の例題に見える傭價と穀物價格との比率を想起すれば、當時の状況は一層明白になる。然るに、より深刻な原因は一般の傭價の上昇であつて、それは一時的な變化を恒常的變化へと轉化した。匡衡の後、「在郷」の貧しい編戸民が雇用労働者階層に組み込まれる例は宣帝期以降決して少ないものではない。第三章に引いた王莽時代の諸侯、第四章に引いた後漢の第五訪・韓暨の諸例以外にも、また姜詩・侯瑾・陳長・關澤などの例がある。<sup>(78)(79)(80)(81)</sup>そのうち、王莽時代の諸侯及び後漢の陳長・關澤は安定した生活手段を持っていた。

先秦から後漢末期にかけて、流民こそが雇用労働者の大半を占め、「在郷」の編戸民の雇用労働者は一度も比率的に優位に立つことはなかった。しかし、前漢前期には、編戸民は安定した生活手段を持たなくても雇用労働をしないという状態であったものが、宣帝期以降、土地など生産手段をもつていても雇用労働で生活費用を都合する状態へと移行した。これは、「在郷」の編戸民の雇用労働に對する態度の重大な變化であると言わざるを得ない。この變化をもたらした要因の一つは賃金に對する魅力の増大であつた。

## おわりに

漢代、特に前漢武帝期以降の雇用労働者の賃金は總體的に上昇傾向にあった。また、個別の雇用労働者が負擔できる消費人口数の増加から見れば、上昇のスピードは一般の物價上昇より更に速かったはずである。その結果、雇用労働者の生活狀況もある程度改善されるようになった。

上昇の原動力となったのは、勿論、社會の中で雇用労働者に對する需要が増えていたからであるが、なぜ兩漢時代、特に前漢後半期より後漢末までの間に、需要が急増したのか。私的經營體（自作農を除く）における労働力の變遷がその原因となったと私は考える。唐長孺は前漢から西晉にかけて、私的經營體に占める奴婢の位置が次第に客に取って代わられた、と指摘した。<sup>(82)</sup> 前漢武帝期から後漢前期にかけて、政府は幾度も禁令を發して奴婢の使用を制限したが、大土地莊園經濟にとって、あまり効果的ではなかったといえ、「課役童隸」という現象は依然として一般的であった。<sup>(83)</sup> しかし、より小規模的な私的經營體あるいは一般の富農は、奴婢の購入・使用の困難をより深く感じていたと推定される。例えば、『太平御覽』卷八二七所引『東觀漢記』に、

更始 長安に在りて自ら恣にし、三輔之に苦しむ。又た署す所の官爵皆な羣小にして、里閭の語に曰く、兒をして市に居りて決せしむれば、作す者得る能わず。傭市に之きて空しく返る、何の故かを問うに、曰く、今日騎都尉の往きて會するの日なりと。猶お是くのごとければ、四方復た京師を信向せず。

とあるように、「里閭」たちは既に、雇用を通じて労働力の不足を補充するようになっていた。後漢後期の崔寔が「假令奴無ければ、當に復た客を取るべし」と言ったのは、この變化の過程を精確に描寫したものである。奴婢から「客」への變更の過渡期に、雇用關係が發展の餘地を得、雇用労働者階層も急速に成長することができた。傭價の上昇はこの高潮期に当たっていたのである。

## 註

- (1) 例えば、瞿兌之「西漢物價考」(『燕京學報』第五期、一九二九年)。
- (2) 勞榦「漢代的雇傭制度」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第二本上冊、一九五一年、同「勞榦學術論文集中編」、藝文印書館、一九七六年、所收)。
- (3) 翦伯贊「兩漢時期的雇傭勞動」(『北京大學學報』一九五九年第一期、同「歷史問題論叢」(增訂本)、人民出版社、一九六二年、所收)。
- (4) 高敏「試論漢代的雇傭勞動者」(同「秦漢史論集」、中州書畫社、一九八二年、所收)。
- (5) 徐揚杰「漢簡中所見物價考釋」(『中華文史論叢』一九八一年第三期)、また同「漢代雇傭勞動的幾個問題」(『江漢論壇』一九八二年第一期)。
- (6) 林劍鳴編譯『簡牘概述』(陝西人民出版社、一九八四年)、一五〇～一五一頁。
- (7) 堀毅「秦漢物價攷」(『中央學院大學總合科學研究所紀要』第四卷第一號、一九八六年)。
- (8) 宋傑「漢代雇傭價格辨析」(『北京師範學院學報』一九八八年第二期)。なお、この論考において宋傑は「僦」という運輸業者の「僦直」も検討している。「僦」の雇用は確かに雇用關係の一種類であるが、漢代において自らの車牛を持つている「僦」が多數存在し、この場合、單純に力を賣る雇用労働者と性格上の相違がある。現時點では「僦」の賃金に關する多數の史料から、車牛など自分の生産手段を持つた否かまで判斷できないため、「僦」の賃金については本稿で論じることはいらない。「僦」に關する研究は、王子今「秦漢時期的私營運輸業」(『中國史研究』一九八九年第一期)を參照されたい。
- (9) 謝桂華「漢簡和漢代的取庸代戍制度」(『甘肅省文物考古研究所編『秦漢簡牘論文集』、甘肅人民出版社、一九八九年、所收)。
- (10) 朱紹侯「對居延敦煌漢簡中「庸」的性質淺議」(『中國史研究』一九九〇年第二期、同「朱紹侯文集」、河南大學出版社、二〇〇五年、所收)。
- (11) 山田勝芳「秦漢財政收入の研究」(汲古書院、一九九三年)第四章第四節、三五一～三五二頁。
- (12) 代表的史料として擧げられるのは「中爲同縣不審里慶□來庸買錢四千六百戌詣居延六月／旦署乘甲渠第(15623)」である。謝桂華、李均明、朱國炤「居延漢簡釋文合校」(文物出版社、一九八七年)二六二頁に據る。このような「庸」と記される漢簡についての最近の研究は、黎明釗、馬增榮「漢簡簿籍再探…以「卒傭作名籍」爲例」(『中國文化研究所學報』第五三期、二〇一一年)參照。
- (13) 朱紹侯「對居延敦煌漢簡中「庸」的性質淺議」(前掲)は既に兩者の性格的な差異を指摘している。
- (14) 睡虎地秦簡『秦律十八種』司空律に、「有罪以賞贖及有責(償)於公、以其令日間之、其弗能入及賞(償)、以令日居之、日居八錢。公食者、日居六錢」とあり、また「戍

- (繫) 城旦春、公食當責者、石卅錢」とある。それぞれ睡虎地秦墓竹簡整理小組『睡虎地秦墓竹簡』(文物出版社、一九七八年)八四、八八頁参照。もしこの二つの記事に據り、當時の一般の雇用労働の報酬を日毎に八錢と想定すれば、年間平均二九二〇錢を得られることになる。穀物価格は一石三〇錢と規定されるから、年間の給料で九七石の穀物を買える。しかしながら、『漢書』食貨志上に載せる李悝の發言によると、一人の成年男子は五人の家族を率いて百畝(小畝)の耕地を治め、年間僅か一五〇石の粟しか收穫できない。となると、五人の収入はただ雇用労働者の一人の給料の一・五倍のほどにしか達しない。そこで、「日居八錢」を雇用労働者の一般の賃金水準とすれば、高すぎると判断せざるを得ない。戰國秦から前漢初期にかけての雇用労働者の事例からみれば、當時の雇用労働の報酬は三人家族どころか夫婦二人の生活支出さえ負擔できないようであった。詳しくは、本稿の第四章(一)参照。
- (15) 宋傑「漢代雇傭價格辨析」(前掲)参照。
- (16) 勞幹「漢代的雇傭制度」(前掲)参照。
- (17) 本稿における「輕勞動」とは鹿の飼育・客傭のような従者役を指し、「重勞動」とは「代役」雇用労働のことを指す。
- (18) 『韓非子』外儲說左上「夫買傭而播耕者、主人費家而美食、調布而求易錢者、非愛庸客也、曰、如是、耕者且深、耨者熟耘也」。買はもと賣に作る、本稿では、松皐圓の說に據り改める。陳奇猷『韓非子新校注』卷一一(上海古籍出版社、二〇〇〇年)、六八三頁を参照。『淮南子』繆稱訓「媒妁譽人而莫之德也。取庸而強飯之、莫之愛也」。『群書治要』卷四五に引く崔寔『政論』「長史雖欲崇約、猶當有從者一人。假令無奴、當復取客。客傭一月千、芻・膏肉五百、薪炭鹽菜又五百。二人食粟六斛、其餘財足給馬」。『三國志』卷一一魏書・管甯傳注に引く『魏略』「時有隱者焦先、……魏略曰、……自作一瓜牛廬、……饑則出爲人客作、飽食而已、不取其直」。
- (19) 『後漢書』列傳七三逸民列傳(梁鴻爲人賃春)每歸、妻爲具食。
- (20) 例えば、『後漢書』列傳四七杜根傳(杜根)因得逃竄、爲宜城山中酒家保。積十五年」という例がある。保の性格に關しては、裘錫圭「新發見的居延漢簡的幾個問題」(『中國史研究』一九七九年第四期)を参照。
- (21) 木牘の原文に「即服直行共侍、非前謁、病不行者、罰日卅。毋(無)人者以庸買」とある。裘錫圭「湖北江陵鳳凰山十號漢墓出土簡牘考釋」(『文物』一九七四年第七期、同『古文字論集』、中華書局、一九九二年、改訂所收)参照。
- (22) 江陵鳳凰山一六八號前漢墓より出土した半兩錢については、蔣若是「論西漢四銖半兩錢」(同『秦漢錢幣研究』、中華書局、一九九七年)に據る。
- (23) 孫星衍等輯・周天遊點校『漢官六種』、中華書局、二〇〇八年、八三頁。
- (24) 司馬遷は『史記』貨殖列傳に「上不過八十、下不減三十、則農末俱利」と言い、すなわち、穀物價格は三〇錢〜八〇



錢の範圍で變動するのがもっとも理想的であるとした。しかし宮崎市定の研究によれば、司馬遷は農業經營と商業經營のそれぞれのコストを論ずる時、穀物價格は一〇〇錢一石で計算している。宮崎氏によれば、その金額は當時の考え得られる價格である。宮崎市定「史記貨殖傳物價考證」（京都大學文學部編『京都大學文學部五十周年記念論集』、一九五六年、同『宮崎市定・アジア史論考』中巻、朝日新聞社、一九七六年、所收）参照。

- (25) 呂思勉「漢人訾產雜論」（『齊魯學報』一九四一年第一期、同『呂思勉論學叢稿』、上海古籍出版社、二〇〇六年、所收）参照。

- (26) 最近の研究については、鷲尾祐子「更卒について——漢代徭役制度試論——」（『中國古代史論叢・續集』、二〇〇五年）参照。

- (27) 『史記』貨殖列傳「庶民農工商賈、率亦歲萬息二千、百萬之家則二十萬、而更徭租賦出其中」。

- (28) 『鹽鐵論』卷一禁耕「故鹽冶之處、大傲皆依山川、近鐵炭、其勢咸遠而作劇。郡中卒踐更者、多不勤、責取庸代。縣邑或以戶口賦鐵、而踐平其準。良家以道次發僦運鹽・鐵、煩費、百姓病苦之」。

- (29) 濱口重國「踐更と過更——如淳説の批判——」（『東洋學報』説林、第一九卷第三號、一九三一年、同『秦漢隋唐史の研究』上巻、東京大學出版會、一九六六年、所收）参照。濱口氏が「平賈一月得錢二千」を疑うことに筆者は賛成するが、氏が「月二千」という價格を『律説』時代の傭價と

認めないことは支持しがたい。詳しくは本章の後文を参照されたい。

- (30) 濱口重國「踐更と過更——如淳説の批判」補遺」（『東洋學報』説林、第二〇卷第二號、一九三二年、同『秦漢隋唐史の研究』上巻）参照。

- (31) 渡邊信一郎「漢代更卒制度の再検討——服虔・濱口説批判——」（『東洋史研究』第五一卷第一號、一九九二年）参照。

- (32) 『漢書』翟方進傳「成帝綏和二年、上遂賜冊曰、……惟君登位、於今十年、……朕惟往時之用、與今一也、百僚用度各有數。君不量多少、一聽羣下言、用度不足、奏請一切增賦、稅城郭墾及園田、過更、算馬牛羊、增益鹽鐵、變更無常。朕既不明、隨奏許可、後議者以爲不便」。

- (33) 釋文は郝樹聲、張德芳『懸泉漢簡研究』（甘肅文化出版社、二〇〇九年）、一五頁に據る。

- (34) 釋文は郝樹聲、張德芳『懸泉漢簡研究』（前掲）、四三頁に據る。

- (35) 釋文は郝樹聲、張德芳『懸泉漢簡研究』（前掲）、四二頁に據る。

- (36) 甘肅省文物考古研究所、甘肅省博物館、文化部古文獻研究室、中國社會科學院歷史研究所編『居延新簡——甲渠候官與第四燧』（文物出版社、一九九〇年）、三一四頁。

- (37) 釋文は郝樹聲、張德芳『懸泉漢簡研究』（前掲）、五五頁に據るが、標點は適宜改めた。

- (38) 多田狷介「漢代の地方商業について——豪族と小農民の

- 關係を中心に——」（『史潮』第九二卷、一九六五年、同）
- 『漢魏晉史の研究』、汲古書院、一九九九年、所收）参照。
- (39) 『漢書』平帝紀「天下女徒已論、歸家、顧山錢月三百。」
- 【注】如淳曰、已論者、罪已定也。令甲、女子犯罪、作如徒六月、顧山遣歸。說以爲當於山伐木、聽使入錢顧功直、故謂之顧山。
- (40) 藤田勝久「漢代における水利事業の展開」（『歴史學研究』第五二二號、一九八三年）参照。
- (41) 「外繇」は少なくとも邊境守備の軍役を含む。渡邊信一郎「漢代國家の社會的勞働編成」（『殷周秦漢時代史の基本問題編集委員會編』『殷周秦漢時代史の基本問題』、汲古書院、二〇〇一年）参照。
- (42) 『漢書』食貨志下「莽知民愁、乃但行小錢直一、與大錢五十、二品並行」。
- (43) 『九章算術』卷三衰分「今有取保一歲、價錢二千五百。」
- (44) 鹽を負う雇用勞働者が一日に歩行できる里數については、宋傑「漢代雇傭價格辨析」（前掲）参照。
- (45) 謝桂華、李均明、朱國炤「居延漢簡釋文合校」（前掲）、三六五頁。この簡は不完全ではあるが、後文に引用した「建武三年爰書」とあわせて考えれば、こちらの記事も雇用勞働者の賃金を指すものであったと思われる。
- (46) 甘肅省文物考古研究所、甘肅省博物館、文化部古文獻研究室、中國社會科學院歷史研究所編「居延新簡——甲渠候官與第四燧」、四七六頁。
- (47) 王子今「秦漢時期的私營運輸業」（前掲）参照。
- (48) 案ずるに、鄭均が和帝永元年間（後八九—一〇五年）に死去したことは正史に明記されているが、生年が不明である。永元年間には建武一六年とは六〇年隔たっている。假に鄭均の享年を八〇歳とすると、建武一六年には二〇歳前後となる。この年齢は『後漢書』に記載される逸話の發生可能な年齢に大體合致する。故に、鄭均傳における「數萬錢」は五銖錢を指す、と推測できる。
- (49) 任乃強「華陽國志校補圖注」（上海古籍出版社、一九八七年）、一八五頁参照。劉琳は「白石子」を「白石子」と改めて、この稱號は羌族の古傳說に由來したものであるとする。劉琳「華陽國志校注」（巴蜀書社、一九八四年）、二九九頁参照。この意見に従えば、「白石子」は雇用勞働の報酬と關係しないことになる。しかしながら、現時點で劉氏の校勘を支持する確證はなく、本稿は一應任乃強の賃金説を採用する。
- (50) なお二つの史料を説明せねばならない。①『太平經』卷一一四大壽誠「父有惡行、自致不還於處。……時以行客、賃作富家、爲其奴使。一歲數千、衣出其中、餘少可視、積十餘歲、可得自用還故鄉」。高敏はこの「一歲數千」に據り當時の雇用勞働の一箇月の賃金を數百錢とし、そして、溝洫志の如淳の注に引く「律說」平買一月得錢二千」を前漢の傭價と考察した。つまり、漢代においては傭價が次第に低下してきたと主張したのであるが、なお検討を要する。「律說」が後漢時代の著作であることについては、後文に論ずる。また、『太平經』「一歲數千」の前提は、「時

以行客」である。すなわち通年で雇用労働をするものではないので、この史料を用いて備償を検討するのは適當でない。②『續漢書』志・五行一「桓帝之初、京都童謠曰、

……車班班、入河間。河間姪女工數錢、以錢爲室金爲堂。

……案此皆謂爲政貪也。……車班班、入河間者、言上將崩、乘輿班班入河間迎靈帝也。河間姪女工數錢、以錢爲室金爲堂者、靈帝既立、其母永樂太后好聚金以爲堂也。王仲舉は「河間姪女工數錢」により、當時の女工の賃金を一日あたり數錢とした。王仲舉遺著、鄭宜秀整理『金泥玉屑叢考』卷二（中華書局、一九九八年）、四二頁參照。宋傑もこの史料を永樂太后が吝嗇のため、工人を雇う時一人あたりに僅か數錢しか與えなかったと解釋した。宋傑『漢代雇傭價格辨析』（前掲）參照。恐らく不確かであろう。民謠の「數」は上聲で讀み、「計算する」とすべきである。この「數」は、『周禮』地官・廩人「以歲之上下數邦用」の「數」と同じく、鄭玄により「數猶計也」と解釋されている。そこで、『續漢書』「工數錢」というのは、ただ金錢の收奪・計算がうまいことを表したものであり、労働報酬に關係しない。

- (51) 沈家本『漢律摭遺』卷二〇（同『歷代刑法考』、中華書局、一九八五年、第三冊、所收、一七五〇～一七五一頁參照。

- (52) 裘錫圭「戰國時代社會性質試探」（『社會科學戰線』編輯部編『中國古史論集』、一九八一年、同『古代文史研究新探』（江蘇古籍出版社、一九九二年、改訂所收）。

- (53) 『戰國策』秦策五「姚賈曰、太公望齊之逐夫、……棘津之庸不讎、文王用之而王」。『史記』田敬仲完世家「潛王之遇殺、其子法章變名姓爲宮太史敫家傭。太史敫女奇法章狀貌、以爲非恆人、憐而常竊衣食之、而與私通焉」。『史記』陳涉世家「陳涉少時、嘗與人傭耕、輟耕之壘上、悵悵久之、曰、苟富貴、無相忘」。『史記』刺客列傳「其明年、秦并天下、……於是秦逐太子丹・荊軻之客、皆亡。高漸離變名姓爲人傭保、匿作於宋子。久之、作苦」。『史記』樂布列傳「樂布者、……始梁王彭越爲家人時、嘗與布游。窮困、賃傭於齊、爲酒人保。數歲、……而布爲人所略賣、爲奴於燕」。

- (54) 何清谷氏も相似した觀點を持っている。何清谷「略論戰國時期的雇傭勞動」（『陝西師大學報』、一九八一年第四期、同『秦史探索』、蘭臺出版社、二〇〇四年、所收）參照。

- (55) 『說苑』卷一「善說」莊周貧者、往貸粟於魏文侯。文侯曰、待吾邑粟之來而獻之。周曰、……今周以貧故來貸粟、而曰須我邑粟來也而賜臣、即來、亦求臣傭肆矣」。

- (56) 『後漢書』列傳七三逸民列傳・梁鴻「遂至吳、依大家皋伯通、居廬下、爲人賃舂。每歸、妻爲具食、不敢於鴻前仰視、舉案齊眉」。

- (57) 『後漢書』列傳二九江革傳「江革……少失父、獨與母居。……革轉客下邳、窮貧裸跣、行傭以供母、便身之物、莫不必給」。

- (58) 『後漢書』列傳六六循吏列傳・第五訪「第五訪……少孤貧、常傭耕以養兄嫂。有閑暇、則以學文」。

- (59) 『後漢書』列傳三十六陳忠傳注に引く『謝承書』(一)施延……家貧母老、周流傭賃。常避地於廬江臨湖縣種瓜、後到吳郡海鹽、取卒月直、賃作半路亭父以養其母。
- (60) 『後漢書』列傳七一獨行列傳・范式「友人南陽孔嵩、家貧親老、乃變名姓、傭爲新野縣阿里街卒」。
- (61) 『太平御覽』卷四二六人事部・清廉下に引く侯瑾「漢皇德傳」一蓋晉、……貧爲官書、得錢足供而已、不取其餘」。
- (62) 『華陽國志』卷一〇上先賢士女總讚論「禽堅、……父信爲縣使越雋、爲夷所得、傳賣歷十一種。……堅壯、乃知父湮沒、鬻力傭賃。得明珠、以求父」。
- (63) 『三國志』卷二四魏書・韓暨傳「韓暨……同縣豪右陳茂、譜暨父兄、幾至大辟。暨陽不以爲言、庸貨積資、陰結死士、遂追呼尋禽茂、以首祭父墓、由是顯名」。
- (64) 『後漢書』列傳六六循吏列傳・衛颯「衛颯……家貧好學問、隨師無糧、常傭以自給」。
- (65) 『後漢書』列傳二七桓榮傳「桓榮……少學長安、……貧窶無資、常客傭以自給、精力不倦、十五年不闕家園」。
- (66) 『後漢書』列傳五四吳祐傳「時公沙穆來遊太學、無資糧、乃變服客傭、爲(吳)祐賃春」。
- (67) 『後漢書』列傳七一獨行列傳・范冉注に引く『謝承書』(一)王「冉……明五經、負笈追業、常賃灌園、恥交勢利」。
- (68) 『北堂書鈔』卷一〇一藝文部・寫書「公孫寫書自給」條に引く謝承『後漢書』公孫曄傳「曄字春光、到大學受尚書、寫書自給」。
- (69) 『太平御覽』卷四四四人事部・知人下に引く『三輔決錄』「龐知伯名勃、爲郡小吏。東平衛農爲書生、窮乏、乃客鍛於勃家」。
- (70) 『後漢書』列傳四三中屠蟠「蟠時年十五、爲諸生、……鄉人稱美之。家貧、傭爲漆工。郭林宗見而奇之」。
- (71) 移民については、『奏讞書』に「即收訊人暨子及買市者舍人、……它縣人來乘庸(傭)、疑爲盜賊者、徧視其爲謂、即薄出入所・以爲衣食者、謙(應)問其居處之狀、弗得」とあり、無戸籍者については、『二年律令』亡律に「取亡罪人爲庸、不智(知)其亡、以舍亡人律論之」とある。それぞれ張家山二四七號漢墓竹簡整理小組「張家山漢墓竹簡〔二四七號墓〕」(釋文修訂本)(文物出版社、二〇〇六年)、一〇九頁、三一―三三頁参照。
- (72) 特に説明すべきは陳勝の事例である。『史記』陳涉世家に「陳勝者、陽城人也、字涉。……陳涉少時、嘗與人傭耕」とあり、この史料から見て、陳勝は在郷の編戸民であると思われるやすい。しかし、實際のところ、陳涉は故郷を離れた移民である可能性が高い。詳しくは辛德勇「閭左臆解」(『中國史研究』一九九六年第四期)参照。
- (73) 『史記』陳丞相世家「少時家貧、……有田三十畝、獨與兄伯居。伯常耕田、縱平使游學。……邑中有喪、平貧、侍喪、以先往後罷爲助」。
- (74) 『漢書』朱買臣傳「朱買臣……家貧、好讀書、不治產業、常艾薪樵、賣以給食、擔束薪、行且誦書。其妻亦負戴相隨、……妻羞之、求去。……其後、買臣獨行歌道中、負薪墓間。故妻與夫家俱上冢、見買臣饑寒、呼飯飲之」。

(75) 『奏讞書』判例一七に、「四月丙辰、黥城旦講氣(乞)

鞠、曰、故樂人、……講曰、十月不盡八日爲走馬魁都庸

(備)、與偕之咸陽、入十一月一日來、即踐更、它如前。

……嗇夫、……妻子已賣者、縣官爲贖」とあるように、秦

時代においては、在郷で且つ妻があり一家を構えた編戸民

が雇用労働に従事する場合もあったことがわかる。しかし

ながら、樂人たる講が雇用労働者となったことは踐更のつ

いで、例外的なことである。講と、雇用労働により生計を

立て、それを主要な生活手段としている人間とは、本質的

な差異がある。この史料の意義を過度に強調してはいけな

い。張家山二四七號漢墓竹簡整理小組『張家山漢墓竹簡

〔二四七號墓〕』(釋文修訂本)、一〇〇～一〇二頁。

(76) 葛劍雄『中國移民史』第二卷(福建人民出版社、一九九

七年)、一〇三頁。ただし、本文中の一三三人を葛氏は一

二一人としているが、おそらく不確かであろう。

(77) 『漢書』食貨志上「宣帝即位、……歲數豐穰、穀至石五

錢、農人少利」。宣帝期は漢代に通じて、穀物價格の最も  
安い時期である。

(78) 『太平御覽』卷四二一所引『東觀漢記』「姜詩、……廣

漢雒人。遭值年荒、與婦傭作養母。賊經其里、東兵安歩、

云不可驚孝子」。

(79) 『後漢書』列傳七〇下文苑列傳・侯瑾「侯瑾……少孤貧、

依宗人居。性篤學、恆傭作爲資、暮還輒燃柴以讀書」。

(80) 『北堂書鈔』卷一〇一藝文部・寫書「賃書以養」條に引

く謝承『後漢書』「陳長、……晝則躬耕、夜則賃書、以養

母」。

(81) 『三國志』卷五三吳書・闕澤傳「闕澤、……家世農夫、

至澤好學、居貧無資、常爲人傭書、以供紙筆」。

(82) 唐長孺『魏晉南北朝隋唐史三論』(武漢大學出版社、一

九九二年)、一〇頁參照。

(83) 唐長孺『魏晉南北朝隋唐史三論』(前掲)、一〇～一二頁

參照。

# 【附記】

小論を仕上げるにあたって六朝史研究會の班員の皆様、吉本道雅教授より貴重なご意見を頂戴し、日本語の校正・史料の訓  
讀については同窓の松島隆眞、野口優兩氏の協力を得た。この場を借りて感謝申し上げます。

## A HISTORICAL INVESTIGATION OF FLUCTUATIONS IN LABOR COMPENSATION DURING THE TWO HAN DYNASTIES

SHI Yang

In regard to employment practices during the Han dynasties, *yongjia* 傭價 (compensation paid to employed laborers in the form of money or provisions such as grains or cloth) has been an important object of study. An accurate definition of *yongjia* is valuable for an understanding of the historical fluctuations in the class of employed laborers and social conditions from the middle period of the Former Han onward. For this reason most previous studies concerned with employment practices during the Han dynasties have dealt with *yongjia* to one extent or another. Nevertheless, the sources are inadequate, disbursed, and often contradictory. This is a fundamental difficulty of research into employment practices, and there has yet to be a scholarly consensus on the amounts of *yongjia*.

This article relies on written sources and excavated materials in an attempt to explain *yongjia* in hopes of building a foundation for research into the relationship between employed laborers and employment practices. In other words, by indicating the general standard of the *yongjia* for fixed periods of time, I will confirm the changes over time in the *yongjia* in accord with social development, and grasp the degree of societal demand for employed laborers.

In this article, I make a principle of this examination to build a foundation of this study based on a systematic critique and reorganization of traditional written sources and to conduct a dynamic consideration of *yongjia*. In doing this, I distinguish public and private employment relations and classify the work of employed laborers roughly on the basis of the content of the work into light and hard labor. I was thereby able to draw the following conclusions. First, for employment in the private sphere during the Han dynasty, it was common practice to provide meals during work hours in addition to monetary compensation. Second, monetary compensation for employed laborers generally tended to increase during the Han dynasty, and particularly after the period of the reign of Emperor Wu of the Former Han. In addition, judging from the increase in the population of consumers who could support individual employed laborers, the speed of the rise must have been faster than the general rise in commodity prices. Third, from the period of the Former Han to the end of the Later Han, the shift in labor from “slaves” to

“itinerant labor” in private enterprises (with the exception of farms) was a cause of the rise of the *yongjia*.

## THE SHANGSHU AND NEICHAO DURING THE HAN DYNASTY

FUKUNAGA Yoshitaka

This article makes a examination of the dynamic changes in the relationships of the *shangshu* 尚書 and the *neichao* 內朝 with the emperor from the middle period of the Former Han through the Later Han dynasties and thereby explores an aspect of the structural changes in the bureaucratic system during the period.

During the Later Han, the *shangshu* for the emperor and *yuanshu* 掾屬 for the *sangong* 三公 were known as *houshe* (喉舌) and each functioned as the office 官房 for those they served. It is thought that the *shangshu* and *yuanshu* were involved in policy debates in the *tai* 臺 and *sangongfu*, respectively, and that the unified opinions decided therein were exchanged and debated by them. This manner of decision-making has its beginnings in reign of Emperor Wu of the Former Han. In other words, during that period close advisors, who would later grow into the *neichao* gathered around the emperor, and likewise Gong Sunhong 公孫弘 who was then *chengxiang* 丞相, gathered talented outsiders 賓客 and had them participate in “policy deliberations” 謀議. Then the emperor’s close advisors and the *gongqing* 公卿 would undertake policy debates. At first, the core of the offices were occupied by those who had personal ties with either the emperor or the *sangong*, but they were gradually incorporated into the bureaucratic order. In this way the process of transformation of the core of the office of the emperor from intimates into the *neichao* and then *shangshu* and the reorganization of the office of the *chengxiang* can be understood as corresponding to one another. Moreover, a similar structure can be seen in the *junfu* 郡府. In other words the *zhubu* 主簿 and *menxia* 門下 corresponded to the *shangshu* and *neichao* respectively.

This phenomenon indicates an aspect of the commonality shared by the emperor, *chengxiang*, and regional officials, but one point that should receive particular attention is that the period of Emperor Wu’s reign was the starting point for the expansion and reorganization of all three. In other words, in the first half of the Former Han, the organization of the *junfu* had not yet been fully systematized,